

アメリカン・バイカーズ・ストーリー 39
**Hard Ride
Long Way**

The old dinosauria will never
die, he just keeps on riding

恐竜は死なず、ただ自由の荒野を駆け続ける(後編)

JUHA KOKKONEN

ユーハ・コッコネン。55歳。フィンランド出身・ドイツ在住。年式不明シヨベル・チョッパー所有。H-Dクラブ・フィンランドの前プレジデントであり、現SMOTO及びMMAFのメンバー。北欧バイカー界のゴッドファーザー的存在。www.finnbikers.fi
※SMOTO = フィンランド・モーターサイクリスト人権協会。MMAF (modified motorcycle association of Finland) = フィンランド・カスタム・モーターサイクル協会。



76年に海軍へ入営。ここで専門教育を受け、電子工学技師の資格を取得することに成功。



さまざまな反戦デモ、暴動、野外ロックイベント……フラワーボリュウション真っ直中の70年代フィンランドを、自作した61年式マシレスのチョッパーで駆け抜けていた頃。

「伝説か……一時的にはハマるね、そういう商業的ナンセンスに。なぜH-Dなのかって？ 単純だよ、TIMELESSだから。僕にとってH-Dは自分で直し直り……つまり、時を越えて永遠に乗り続けられるバイクだからさ！ そんなのって他にBMWぐらいじゃないかな」
イジつた分だけ親密な仲になり、走った分だけ無用な思い込みやこだわりがどこかの路上に落っこちていく。ユーハ・コッコネンは言う、H-Dは時間という無常の宿命から解放された「FOREVER YOUNG いるんな意味でタイムマシーンみたいな存在だ」と。
88年、離婚を機にユーハの選んだ新しい目的地(完璧なCOPPOLE)。背負った慰謝料に養育費……だが、
「今だからこそH-Dじゃないのか!?」
漠然とした想いを決意に変えたのは、ひとりの元バイカーとの出逢いだ。まったくの偶然で高収入の転職先が決まった90年、地元ツルクで知り合ったマヤは、かつてHONDA 500 FOURを相棒にヨーロッパの黄金の70年代を駆け抜けた女性。それぞれ別の場所で、

れども共有した時代と風の記憶。そしてバイクから遠ざかっていた彼女もその時H-Dに強く惹かれていた。2人はゆっくと、しかし強く結ばれていく。正しい時に同じ夢を抱いて出逢い、のちに数10万kmの道程を伴走するソウルメイトとして。
「人生で一番長い冬だったな。あれほど春が待ち遠しかったことはないね」
マヤと、そして手に入れた初めてのH-Dと共に陽光が戻るのを待った92年の冬。それは長く、だが幸せな時間だったに違いない。オファーは88年式XLH1200、奇しくも彼が「新しい旅」を始めた年に生まれたスポーツスター。サドルに腰をおろし、ちらりと見守るマヤの瞳を覗き返した。すべては34年間の人生初めての経験……。オナーに促されるままスタータースイッチにかけた親指を押し込むと……響き渡ったエキゾーストノートの、まるで新しい命の上げる産声のようだった！ 発動機というにはあまりにも有機的なその音が、次第に周囲のすべての音をユーハの意識から消し去る。不思議な静寂の中で不平等間のワルツだけが響いていた……。

相棒と頼りになる足……それは所有なんかではない、「人生の共有」なのだ。

決断。銀行ローンの審査。そして1週間後、小切手を手に名残惜しうな顔の元オナーと握手を交わした。レバーを握りシフトを踏み込むとエンジンの意思が伝わってくる——グズグズするなよ、さあ走ろうぜ!! 小気味良い挑発。だが言われるまでもない! すでに木枯らしに変わった10月の風の中へ2人と1台が走りだした。
「シーズンが終わっちゃったのが無性に悔しかったね! だがまあ、ワクワク待つのもセンゼンOKって感じだった!」
いつもより早く訪れた北欧の冬、だがスロツトルを握る右手はグローブの中で汗ばむ。23年前の、あの「完全な勝利の感覚」と共にユーハはひとつの時の輪が閉じるのを感じた。H-Dの、そしてタンデムシートのマヤの鼓動が背中に伝わってくる。
走り出したばかりの新しい輪のずつと先で、永遠の夏が再び大きな炎となって力強く燃え始めていた——H-Dワールドの扉を開き、さらに深い世界への渴望と探究心を掻き立てたEVQ、KICKスタートの魅力と愛情次第で別物に生まれ変わる旧車の魔法を教えて

くれた77年式XLCHアイアン。そしてすべての愛を注いだ「憧れの君」95年式PAN SHVEL CHOPP……18年の時が過ぎ、マヤは72年式シヨベルに乗り換えたが10万kmを共に駆け抜けた80年式FEON SPORTYがいまだ恋しくて仕方ない。
ユーハといえは80年式シヨベル1340と02年式ソフテイル1450が相棒と頼りになる足……と言うところだが、所有ではなく「人生の共有」。乗り継いできた1台1台への感謝は変わらない。
Chapter/Present 2年、National Present 7年、2000年のスーパードライバーを仕切り、多くのラリーイベントを主催し、最も熱狂的なリーダーとしてフィンランド最大のMC、HDCFを引っ張ってきたユーハは数年前、突然すべての役職を辞してクラブを去った。急造バイカーと産業に呑みこまれたシーン。会報に寄稿した最後のメッセージIIクラブとシーンへの痛烈に歯に衣着せぬ批判は、無理解と怒罵、そしてわずかの諷刺を持って迎えられ、数々のディベートを巻き起こした。



10万Kmを共にした80年式IRON SPORTYは「いまだ忘れ得ぬ相棒」らしい。



ロックとバイクと生き方が、ほとんどの若者にとって唯一無比のカルチャーだった70年代のフィンランド…のヒッピーなワンシーン。It's the proof of Biker in '70S Finland.



- ※1: FUCK THE WORLD=「世界をぶち壊せ!」または「クソつたれの世界め!」。FUCKには性行為以外に「だめにする、ぶち壊す」の意味がある。
- ※2: LIVE TO RIDE=「走る(バイクに乗る)ために生きる!」
- ※3: BROTHERHOOD=兄弟愛・絆。「クラブメンバーだけが信じ合える兄弟」。男性文化であるBIKER社会では無視されがちだが「SISTERHOOD」とカップリングで使用すると女性受けは格段に良くなる。JOHN LENNONのIMAGINE (Live in New York) 参照。
- ※4: AMA=American Motorcycle Association、合衆国二輪車協会。
- ※5: MoCo=Harley-Davidson Motor Company、ハーレー・ダビッドソン社。

「思想やBiker文化、PUNK HIPPIE……それがなんであれファッションや流行のスタイルと随時、意味は失われ覆い隠されてしまう。HDFCそしてHOG……シーンや組織の巨大化も結果は同じだ。流行は真の意味を子壊しかねない。本当の意味の上ツラを商業化しただけのモノだから」

2000年のスーパーライダーを境に、メンバーは1000人弱から一気に2000人に急膨張し、ブームに煽られ、受け皿としたクラブ、ユーハや古参メンバーの意に反し、打ち出された新運営方針「ALL HD OWNE R WELCOME」(ハーレー所有者なら誰でも可)に群がった中には、HDはるかバイク歴1年未満の初心者までがいた。ピカピカのマシンでバーにばかりタム口するBANDIT、アウトロー気取りで素行の極端に悪い輩……頭から爪先までオレンダングロでエスプリを効かせた連中が我が物顔でライダーを跋扈し始め、本当の意味すら知らぬスローガンをウイスキーボトル片手に声高に吠えてた。

「ブラザーフッド? フリーダム? 大好き

な言葉らしいが、今や賑々しいライダーで大馬鹿鹿野郎がわめき散らすだけの無意味なお題目に成り下がった。カタチや語りに入る前に歴史を……だろ?」

19世紀の終わり、モーターサイクルの誕生と同時に「IRON MAN」と呼ばれた一握りのフリークたちによって産声を上げたBANDITカルチャー。ウルサくて、汚くて、非妥協的・非社会的で……、だからこそ高貴な、この希有な機械の抗い難い魅力と、その殉教者たちが共に織り上げた歴史。第二次大戦、そしてベトナム……、アメリカの自由と正義を信じ込んで戦い、戦場を受けた精神的外傷ゆえ社会に拒絶された帰還兵たちは、偽善の日常に背を向け、BANDITを駆る自らを1%ERと呼び、今度こそ信じられる価値感と哲学でリスク度外視の自由の王国MoCoを創り上げた。

「FUCK THE WORLD (※1)・LIVE TO RIDE (※2)・BROTHERHOOD (※3)……みんなホリスターやBANDITたちの生きざまの宣言だ。知ってるかい? AMA (※4)と組んでアウトローたちを冷遇したMoCo (※5)は、映画「EASY RIDER」

本物のBIKERカルチャーは、流行に隠れて生き続けている。 Don't leave your friend !!

の制作にすらバイクを提供しなかった……イメージを傷つけるBANDIT文化を疎ましがってね。だが後年、抜け目なく利用するようになるのさ、その「イメージと伝説」をね! そうとも知らずに宣伝戦略にのぼせ上がった勘違い野郎が「よお! ブラザー、フリーダムだ!!」冗談じゃない!! だからこそ伝えようと必死になった」

今、自分たちも走り続けている、同じ歴史の延長線上に! BANDITユーハの想い……。しかし、ひとり、またひとり、クラブを去ったのは黎明期からシーンを生き残った古参バイカーだった。そしてライダーを上目線する真新しいレザーと奇妙な顔粉々になった絆……。ユーロ礼でできた幻想の自由。もはや散弾銃もレッドネックも必要なかった。

「できることはした。与えるべきも得るものも、あそこには残っていない……!」

ユーハがそう自覚した時、クラブのメンバー総数は6000人を超えていた。お前の隣のブラザーを見つめてみる。ポケットの中身を半分くれてやり、持ってる食い物を半分ずつに分けあい、そして理由なんて一切聞かず無

条件でそいつを助けてやれるか? ユーハが引用した、ある無名バイカーの言葉だ。「走りが一番楽しい土地? フィンランドさ!!」誇らしげに「こりと笑う。縦1300km、横700kmほどど手つかずの自然の中に人口わずか530万人。スウェーデンとの間に広がる多島海。星の数ほどの湖の畔のキャンプ場と魔法の風景を結ぶ田舎道に点在する小さな村。ラップランドは精霊の森。」「きつと自分自身と出逢う旅になる、まったくひとりになれるからね」

ムースやエルク、圧倒的な存在感に旅人は敬意を取り戻す。想像だけでは我慢できない。君が旅人なら一度は憧れたスナフキンの故郷だ。斜に構えつつそれでも熱い想いを抱き続ける姿は、BIKESINでユーハに重なる……ふと思った。そう、「Don't leave your friend」が彼のモットーだ。

「本物のBIKERカルチャーは今なお生きている。流行の後ろに隠れているものを見てごらん、きつと素敵なものを見つめるだろう」

フィヨルドと白夜の彼の故郷を、今年こそきつと訪ねてみよう。

Hard Ride Long Way

